

特集：卒業生便り

就職を繰り返した末・・・

高野秀一（筑波大学 生物学類 1997年3月卒業、農学研究科博士課程 2002年3月修了）

リサーチ・アドミニストレーター (URA) として 2012 年の夏より順天堂大学で研究推進業務に携わっております、高野と申します。昨今、就職氷河期という言葉が新聞に頻出していますが、ここでは博士号取得者のキャリアパスを主題に、私の遍歴を一例として紹介させて頂ければと思います。

■私の就職活動

私の経歴を簡単に申しますと、上記の通り大学院に進学、博士号取得、大学教職員、米国大学ポスドク、国内研究所ポスドク、ラボプランナー、URA、という流れです。博士の道を目指した時点で、カタにはまった人生にはならないと覚悟していましたが、振り返ってみると、やはり当初の予想通りになりました。

学類卒業から 16 年間で 6 つの分岐点があったことなのですが、道を選ぶ際に共通したことは、友人や家族の意見を取り入れつつ、自他の視点で自己の能力を把握して思い込みを減らし、長く悩まず一晩かけてこの先 5 年程度の方針を決めたことです。結果として、活動 3 件以内に分相応な仕事に就くことができました。内定の決め手はすべて間接的な人脈でした。知人の知人への紹介や、たまたま面接者が知人の知人だったこともあります。

各職場の経験は後の仕事にも大いに役立ちました。同僚や知人と飲食、運動、映画、旅行、等楽しく過ごした様々な経験も就職活動と実務に役立っています。また、離職時には周りの人達に惜しんでもらえた（と思う）ので、十分な働き（と遊び）をしてきたのだと思います。ちなみに離職理由は、好奇心・給与・家庭の都合でした。特に、家庭の都合で職場を離れるという理由は私に限らず、知人にも見受けられる大きな理由です。親の病気や子供の教育環境のためなど、周辺の要素も考慮しつつ道を決めないと、折角の就職もすぐに方向転換を迫られる場合があります。家族を顧みず、という決心があれば話は別ですが。

さて、私の就職の考え方はこれくらいにしておいて、私がこれまでどのような仕事場にいたのか、特に、研究以外の仕事について紹介したいと思います。

■国内と海外の環境で研究経験を積む

大学院時代は、筑波大学連携先のつくば産総研で 5 年間過ごしました。研究指導者がインド出身であったせいか国際的な環境で、アジア・オセアニア・南米からの研究員たちと知り合うことができました。この辺でカタコトの英語でも話は通じるものだったことを知りました。互いのバックグラウンドに興味を持つことが、言葉が不慣れでも仲良くなるために大事なのだなと感じました。

博士号取得後 27 歳時、家内とともに金沢で移り住み、金沢大学薬学部で研究と教育に携わることができました。大学の先生方や学生さん達の力添えもあり、忙しいながらも充実した研究生活

を送ることができました。就任 2 年目に薬学部の移転があり、この経験が後々の就職に役立つこととなります。

31 歳時、金沢からテキサスに研究の場を移し、ポスドクとして University of Texas Health Science Center at San Antonio (UTHSCSA ユタスカと読む) に務めました。面接で渡米したとき、日本との違いに驚いたことは、往復交通費・宿泊費・食費はこの大学から支給されたこと、年俸額交渉があったことです。それから面接滞在中、ダウンタウンの観光時間がスケジュールに組まれていました。これから住むかもしれない街の良いところを知っておくべきだ、という理由です。日本の研究系の就職活動もこうなるといいですね。

米国出稼ぎの 3 年間は研究だけに集中できた充実した期間でした。研究だけでなく、日本とは違う大学や社会システムの下での生活、英語能力の飛躍的向上、異文化など、刺激が多い日々でした。一方、テキサスの生活スタイルはゆったりとしていて、家内とともに海外生活を楽しむこともできました。



牧場で学部の年次研究報告会を満喫する著者

帰国時は、これまた産総研のインド出身指導者を頼り、産総研のイノベーションスクール制度を利用しました。これは博士号取得者の研究と就職を支援する有り難い制度で、8 ヶ月間お世話になりました。この時点で 36 歳となり、自分の性格と経験に似合った仕事を探すことにしました。研究職ではなく、研究を支援する仕事に特化して就職活動を開始しました。結果、博士号取得者就職支援と研究所設計支援のお仕事が候補に挙がり、目新しさと給与額を考慮して後者を選択しました。

■研究から設計の世界へ

この企業は日本の研究の場を最新のデザインと設備で支えるため、欧米の研究環境を日本に導入するというビジネスモデルで、成功を収めていました。その中で私は、国内・海外の研究の場に

いた、英語が話せる、大学移転を経験していた、実家が設計事務所、という経験をフルに活かし、大学・研究所・製薬企業のラボデザインに携わりました。アトリエ系の設計事務所だったせいか、色や形に非常にこだわる人々の集団で、プレゼンやその資料の作り込みの繊細さ、顧客へのわかりやすさの追求は素晴らしいものでした。また、官民の顧客やプロポーザルを通して協働した他社の設計事務所・ゼネコンの関係者の皆さんとのやり取りを通じ、研究畑にはない視野の広がりを感じることができました。

業務の内容は、主に、1) 採光やラボとオフィス機能の関係を配慮しつつ、私が部屋の間仕切りと実験台・機器の配置案を手書きし、これを設計士がCADで図面化、さらに私がイラスト系のアプリケーションで色塗りや提案内容の意味や特徴の説明書きを追加して、プレゼン資料にするという作業、2) 国内・海外の最新の研究環境情報をもとに、ラボ内環境改善のコンサル業務でした。新しい研究所やラボの立ち上げ時には必ず移転業務があるため、既存機器の調査も行いましたが、研究経験者ということもあり、顧客側には安心感を持って頂けたようです。社長をはじめ同僚の皆さんのお陰で、営業、見積り、会社経営についても経験を積むことができました。

■日本初のラボプランナー

研究所や実験室を専門として設計に携わるラボプランナーやラボデザイナー職は米国では一般的です。私はおそらく日本初のバイオ系博士号付ラボプランナーだったのではないのでしょうか。参考までに、設計・計画上で最も重要なことをお伝えしますと、研究者が最も長く滞在する実験室は、外部景色を見渡せる一等地に配置しなければならないことです。社長や共同設計者のケン・コーンバーグ(ノーベル賞受賞者アーサー・コーンバーグの息子)から徹底的に指導されました。コーンバーグは設計図面上でラボが少しでも内側にあるのを見るや否や、彼は両親指を下に向け、**Boo!!!** と叫んでいたことを良く覚えています。設備設計の都合などは二の次で、研究者の作業環境を最優先に据えるという心念を強く感じました。

さて、デザインやプレゼンの業務を続けているなか、しばしば感じるようになりました。「この表現テクニックを使えば、研究助成金申請をもっと格好よくできたな…」「この整理術を使えば、研究費申請がわかりやすかったなあ…」と。実際、設計業務の受注に向けたプロポーザルは、競争的に資金を獲得するという点で研究費申請書作成とほぼ同じでした。その一方で、海外の研究支援サービスのひとつとして、大学リサーチ・アドミニストレーションの有用性を幾つかのコンサルで紹介しておりましたが、「あれ?この仕事、これまでの経験をすごく活かそうぞ」という思いがふつふつと育ち始めました。

■やっぱり URA やりたくなっちゃった?

これが私の気持ちを「真剣」に伝えたときの社長のセリフです。そして、日本の研究を推進するという目的は一緒、お互いに頑張ろう、という有り難いお言葉とともに新たな道へ背中を押して頂きました。その数年はタイミングよく、政府が URA 導入を後押しし、各大学が URA を募集している最中でした。私は研究支援の計画と抱負、これまでの経験をアピールし、順天堂大学の URA 2名のうちのひとりとして就任することができました。

URA の業務とはなんだろう?と思う方のために、その内容をご紹介しますと、実は目新しいものではなく、研究者が研究と並行で進めている事務作業を支援あるいは分業する仕事です。大学助手・助教、研究系事務員、秘書と同様の業務を基本に、大学の研究や知財戦略や安全管理・指導などにも関係します。大学は URA を設置することで、研究者が研究に専念できる時間を増やし、円滑な研究教育環境を目指しています。米国では約 50 年前からこのような専門職が導入され、大学の研究力の強化を図ってきました。日本ではこの数年で始まった挑戦で、これから定着するかどうかは、我々や各大学で活動されている URA の活躍次第かもしれません。

いまのところ私が行なっている業務は、科研費等の研究費申請書添削、スライド図作成支援、学内の研究環境改善の企画提案等が主です。同室には元科学コミュニケーター指導者や知財専門家がおり、新しい刺激を受けつつ少しずつ仕事の幅を増やしていこうと思っています。そして大学事務担当者や教職員の皆さまから温かく見守って頂く中で、私の技能と経験を活かしながら楽しく仕事ができる素晴らしい職場で業務を遂行中です。

■最後に

日本社会の中で、私のように職場を頻繁に移ることは一般的に好まれていません。その人物に何か問題があると決めつけられて見られます。頻繁な転職を可能としたのは、仕事を共にした人々の協力の賜物です。実は日本に限らず米国でも同じで、就職には第三者からの複数の紹介が特に重要です。仕事は単に金銭獲得の手段ではなく、信用を蓄積するための手段でもあります。米国の学生は就職前にボランティア活動をする聞きますが、おそらくこれは信用獲得の一環なのだと思います。私の過去を思い返せば、卒業研究からその信用蓄積の第一歩が始まったと思います。複数の仕事場で信用を着実に積み重ね、そして転職の際、「出世払い」という言葉とともに関係者を頼りました。結果、数々の良い職場に出会い楽しい経験とキャリアを積み重ねることができました。また、進路を考える際、友人や家族の意見はとても貴重でした。みなさんには感謝の気持ちでいっぱいです。

以上、長くなりましたが就職を繰り返した末の事例紹介でした。この記事を読んで下さっている方の中にこれから就職を控えている方がいれば、私の経験が少しでも参考になれば幸いです。

Communicated by Fumiaki Maruo, Received January 16, 2013.

Revised version received March 27, 2013.